

外国語科における小中の円滑な接続を目指して

—音と文字の指導の実践—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 萱沼美結

1. 研究背景

小学校における外国語教育必修化の始まりは2011年に遡る。当時高学年に新設された外国語活動は「領域」という位置づけであった。そして学習指導要領の改訂を迎えた2020年、高学年では外国語活動に代わり新たに外国語科が導入された。「教科」としての小学校外国語教育の始まりである。このようにここ数年で小学校外国語教育は大きな変化を迎えている。文部科学省(2017)はその必修化から教科化までを振り返り、成果と課題を踏まえた上で、「中学校への接続を図ることを重視する」(p.63)としている。

外国語科における小学校から中学校への接続が課題であることは、ベネッセ教育総合研究所(2018)の「中3生の英語学習に関する調査」の結果からも見て取ることができる。「英語が好きですか」という問いに対して肯定的な回答をした児童・生徒の数は、小6生、中1生、中3生と学年が上がるにつれて減少することが明らかとなった。その中でも大きな減少が見られたのは小6生から中1生にかけてである。中1生から中3生にかけての減少率が0.5ポイントであったのに対し、小6生から中1生にかけての減少率は6.0ポイントであった。この結果からも、外国語科においては小学校から中学校への接続が課題であると考えられる。

では外国語科における小中の接続において、子どもたちはどのような点に困難さを感じているのだろうか。ベネッセ教育総合研究所(2016)の「中高の英語指導に関する実態調査」によると、生徒が英語につまずく原因上位5項目のうちの3項目、「単語(発音・綴り・意味)を覚えるのが苦手(60.9%)」「文や文字を書く

ことが苦手(57.2%)」「文字や文章を読めない(文字から音に上手く変換できない)(43.1%)」は音と文字のつながりの理解に関係するものであった(尾上, 2016)。つまり音と文字のつながりを理解できていないことが、外国語科の小中の接続が円滑に行われていない要因の1つと考えられる。また、先述した文部科学省(2017)が挙げた小学校英語教育の成果と課題においても「音声中心で学んだことが、中学校段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない」(p.63)という、音と文字のつながりに関する指摘がされている。

そこで本研究では、外国語科における小中の円滑な接続を図るために、音と文字のつながりを指導する方法を「音と文字の指導」と定義し、以下のようなリサーチクエスション(以下、RQ)と仮説(以下、RH)を設定した。

RQ) 小学校で音と文字のつながりを学習することは、中学校の英語学習への円滑な接続に対して効果があるか。

RH) 音と文字の指導を取り入れた授業を行うことで、情意フィルターが下がり中学校の英語学習への意欲が高まる。

中学校の英語学習への円滑な接続の定義は様々である。そこで本研究では、3. 結果で後述する情意フィルターが下がり、インプットが入りやすい状態にすることを、小中の円滑な接続と捉えたい。このRHを立証することを目的とし、研究を進めていく。

2. 音と文字の指導構想と実践

(1) 対象

山梨県 A 小学校 第 6 学年児童 33 名
 (実践は 2 学級で行ったが、事前・事後でデータ収集を行ったのは 1 学級のみである。本研究ではこの 1 学級を分析の対象とする。)

(2) 方法

実践時期は 2021 年 10 月から 11 月までの約 1 ヶ月間である。授業時間数は全 8 時間で、毎授業の冒頭 10 分間を使いモジュール的に実施した(図 1)。本時の内容との直接的なつながりは考慮せず、独立した授業冒頭の活動として捉えて計画、実践した。

学習の流れ	主な学習活動・内容	指導上の留意点
2min	1 Greeting ○挨拶をする。	◎元気づけ挨拶を交わし、日付・天気・持ち物等を確認する。
10min	2 Fun time ○アルファベットフォニックスの学習を行う。 ・Animal jungle ・Alphabet quiz	◎教科書の『Sounds and letters』をもとに作成したアルファベットクイズで音の認識を確認する。
10min	3 Let's Listen 2 ○「暮らしている生き物」と「食べているもの」について聞き取る。	◎記入は日本語でも良いことを伝える。 ◎新出表現や新出単語を用いた児童とのやり取りの中で、答えを確認する。
2min	4 Today's goal ○本時のめあてをつかむ。 Who am I? クイズを楽しもう!	◎今回は主語が I となる、なりきりクイズであることを伝える。
5min	5 Teacher talk ○「Who am I?」のクイズを聞いて、本時のメインの活動のイメージをつかむ。	① I eat ~ ② I live in ~ ③ I have ~ / I can ~ Who am I? ◎ I have ~ / I can ~ の表現を聞かせる。
11min	6 Activity ○Who am I クイズを出し合う。	◎まず何人かの児童にクイズを出してもらうことで、活動のイメージをしやすくする。 ◎時間があれば班ごとにクイズを出し合う。 ◎クイズに答えるチャンスを 3 回までにすることでテンポよく回していく。
5min	7 Reflection ○本時の学習を振り返る。	

図 1 授業の流れ (例)

(3) 音と文字の指導構想

① KEET メソッド

音と文字のつながりを指導する方法として、本研究では KEET メソッドを参考にした。このメソッドは、京都の小学校や大学などの教員

で構成される小学校英語教育学会京都支部 (Kyoto Elementary school English Teachers, 以下 KEET) 運営委員メンバーによって考案された、音から文字への指導を行うメソッドである。このメソッドについて山本・田縁 (2020) は「音と一致させながら文字を習得するための指導方法であり、音と文字の習得プロセスに沿って、何をめあてとした指導であるのかを段階に分けて具体化したもの」(p.83) としている。その具体化された 7 つのステップは以下の通りである。

- A. アルファベットの形の認識と名称読みができる。
- B. アルファベットの音読みがわかる。
- C. 単語が音素で成り立っていることを認識する。
- D. 単語が読める (という認識を持つ)。ー トップダウンとボトムアップ指導
- E. アルファベットの大文字・小文字を 4 線上に書ける。
- F. 語や定型文を筆写する。
- G. オリジナルの文章を書いてみる。

この A~C のステップは順序性を問うものではなく、A と E というように組み合わせる指導することも可能とされている。

音と文字をつなぐ指導の実践が様々ある中で KEET メソッドを選択した理由は、「実践のしやすさ」にある。山本・田縁 (2020) は KEET メソッドの特徴に、小学校教員が中心となって生み出したものであるため、現場の実態に応じた、誰でも実現可能なメソッドであることを挙げている。音から文字へとつなぐ指導は複雑である。しかしこのメソッドは簡潔明瞭に 7 つのステップにまとめられており、各ステップの目的も 1 つに絞られていたため指導を構想する際の参考にしやすかった。そのため、数ある実践方法の中から KEET メソッドを選択した。KEET メソッドを採用したもう 1 つの理由は、学習指導要領に準じて考案されているからである。山本・田縁 (2020) は KEET の 7 つのステップと文部科学省の指針には全くブレがないとしている。

②全体計画

児童の実態、また全8時間でモジュール的に実施するという方法を加味し、本研究ではKEETメソッドの「A. アルファベットの形の認識と名称読みができる」から「D. 単語が読める(という認識を持つ)」までの読むことに関連する指導のみを選択し、計画を行った。そのため本指導におけるねらいを「文字とそれに対応する音について学習し、英単語が推測して読めることを実感する」とした。音と文字の指導全体の流れは以下の通りである。

- | |
|---|
| <p>Step1 文字の音読みが分かる</p> <p>Step2 音素を認識する</p> <p>Step3 単語が読めるという認識を持つ</p> |
|---|

Step1がKEETメソッド7つのステップのAとBに、Step2がCに、Step3がDに該当する。Step1でAとBを含めたのは、アルファベットの形の認識と名称読みの理解ができているという、対象児童の実態があったからである。Step1ではアルファベットの音読みを中心に取り扱い、その際簡単に形の認識と名称読みを復習するようにした。

③各時間の概要

各時間の内容については、対象児童の実態に合わせて授業を独自に開発した。取り扱う教材についてはできるだけ教科書にあるものを用いるようにした。ステップごとの概要は以下の通りである。

【Step1 文字の音読みが分かる】

まず1～4時間目にかけて文字の音読みの指導を行った。10分間の流れは以下を基本とした。

- | |
|---|
| <p>I. アニマルジングル (3分)</p> <p>II. フラッシュカードでの確認 (2分)</p> <p>III. アクティビティ (5分)</p> <p>1～3時間目・・・ミッシングゲーム</p> <p>4時間目・・・アルファベットクイズ</p> |
|---|

I. アニマルジングルは使用教材 New horizon Elementary6 の電子教科書で取り扱われているものである。アニマルジングルを歌うことで文字の名称読み・音読みを合わせて練習し、児童自ら文字に音があることに気づけることを目指した。II. フラッシュカードはアニマルジングルをもとに作成したものを使用した。ALTの後に続いてリピートする形で「名称読み(ei), 音読み(/æ/), 単語(ant)」の練習を行った。III. アクティビティでは1～3時間目でミッシングゲームを行った。黒板のフラッシュカードの中から、教師が隠したカードを児童があてるというものである。小文字の形の認識に課題があるという児童の実態を踏まえ、小文字の形に着目できるこの活動を選択した。活動を行う中で答えを述べる時も「名称読み・音読み・単語」の3つをセットで述べることを徹底した。4時間目については、児童の理解度を測るため、また児童自身が自分の理解度を認識するため、アルファベットクイズと題し、以下のような簡単なリスニングを行った。

Quiz①聞こえた音の順に()に番号を書こう。

(1) G H D B F (2) N L Z R K

() () () () () () () () () ()

(3) S X R Y W

() () () () () () () () () ()

Quiz②次の絵の始まりの音に○をつけよう。

(1) o a f i

(2) q m p c

この問題は教科書巻末にある Sounds and letters の問題を参考に作成したものである。アルファベットクイズの Quiz①では聞こえた音の順に番号を書かせ、Quiz②では聞こえた単語のはじめの音を選択させた。

【Step2 音素を認識する】

英単語の構造に着目するための活動を5時間目で行った。これはALTから「児童は文字に音があることを理解しているが、例えばdogの/d/がそれだと認識していない」という単語の

構造の理解に関する指摘を受けたためである。また英単語の構造を理解しておくことは、次から始まる音の足し算を行う上でも必要な要素である。10分間の流れは以下の通りとした。

- | |
|---------------------------------------|
| I. キーサウンドゲーム (7分)
II. フードジングル (3分) |
|---------------------------------------|

I. キーサウンドゲームはキーサウンドを指定し、その音が聞こえたら机の上に置いた消しゴムを取るという活動である。単語の構造に着目させるため、キーサウンドにはオンセット(初頭音)とライム(語尾音)を用いた。用意したキーサウンドは以下の通りで、括弧内の単語を聞かせながらキーサウンドが聞こえたら消しゴムを取るよう指示を出した。

- ・オンセット・・・s (tiger, tea, tomato, salt)
 h (fish, flower, ham, five)
- ・ライム・・・ed (hat, bed, cat, mat)
 og (big, dig, dog, fig)

II. フードジングルは文字の音に気付かせることを目的に扱った。1~4 時間目ではアニマルジングルを扱ったが、それを単語練習だと思っている児童が何人かいた。そこで同じく電子教科書で取り扱われていたフードジングルを用いることで、2つの教材の共通点から文字の音に注目できるようにした。

【Step3 単語が読めるという認識を持つ】

これまでに学習した知識を用いて、音の足し算をしながら単語を読む練習を、6~8 時間目にかけて行った。ステップ3に関しては各時間で用いた教材が違う為、時間ごとに概要を説明していく。

まず6時間目は、音の足し算の導入をスムーズに行うために「Alphablocks」と言われるyoutube教材を用いた。これは実際にイギリスで子ども向け教育テレビ番組として放送されているものである。各文字のブロックのキャラクターがその文字の音を発しながら音楽に合わせて登場し、ブロック同士が手をつないで音を足し算していくことで単語が完成されると

いうアニメーションである。筆者には、音の足し算を初めて学習した際に足し算のイメージを持つのが難しかったという経験があった。そのため、この教材を用いた導入を行った。動画を視聴する際はただの楽しい動画鑑賞で終わってしまわないように、どのような音や単語が出てくるか聞き取るように具体的な指示を出した。動画を視聴した後は、パワーポイントを用いて動画内で出てきた音や単語を確認する活動を行った。

続いて7時間目は、「2文字で1つの音」を含む単語を読む対象として扱った。理由は、「2文字で1つの音」が分からないという様子が何名かの児童から見受けられたため、より読めたという実感を与えやすいのではないかと考えたからである。まず同電子教科書で取り扱われていた「2文字で1つの音」になるジングルを使用して音を確認した後、フラッシュカードを用いてそれらの音の確認をALTと一緒に行った。ここで扱った「2文字で1つの音」はch, sh, th[θ], th[ð], wh, ck, ngの7つである。それらを練習した後、chinやdishなどの「2文字で1つの音」を含む単語を、ch+i+nというように音の足し算をしながら読む練習を行った。

最終時間となる8時間目では、外来語を読む対象として用いた。児童にとって外来語は音では馴染みがあるが文字では学習していないため、より読めたという実感を与えやすいと考えたからである。これまでの学習を簡単に振り返った後、lump, pocket, athleticの単語をl+u+m+pと足し算しながら読む練習をした。

3. 結果

(1) 各時間の概要

実践を行った際の各時間の児童の様子について、ワークシートの記述を交えながら分析していく。なおワークシートには、授業の振り返りとして「よくできた」・「できた」・「できなかった」の3択で自己評価を行う欄と、授業の感想を簡単に記入する欄を設けた。感想の記入は任意とした。

【Step1 文字の音読みが分かる】

ここでは目立った記述が2つ見られた。まず1つ目は、活動の楽しさに対する記述である。「ミッシングゲームが楽しかった」や「にぎやかで楽しかった」という感想が多く見られた。もう1つは単語学習に関する記述である。「色々な動物の英語の言い方を覚えることができた」や「初めて知った単語もあって勉強になった」などという感想が約半数の児童に見られ、多くの児童が音と文字の指導を単語学習と捉えているようであった。

一方、本指導のねらいとしている「音と文字」に関する記述は少なかったが、「ABCを使っても（名称読みと）同じ読み方をしないところに注意しようと思った」や「アルファベットは”エー”や”ビー”と発音していたが”ア”や”ブ”などの発音をしっかり覚えることができた」という感想も見られた。この記述から、文字に音があることに気づき始めた児童がいることが明らかになった。実際指導をしても、回を重ねるごとに教師がアルファベットを指さすだけで自然と音読みをする児童の様子が見られるようになった。その他の記述としては、「もう少しきれいに発音したい」や「ちゃんとした発音ができた」といった発音の向上に対する意欲がうかがえる感想も散見された。

Step1 の最終時間となる4時間目に実施したアルファベットクイズでは、HやFの聞き分けで迷っている児童はいたが、クイズ自体は全員が全問正解であった。このことから、4時間目までの指導で児童が文字に対する音について理解していることが示された。

【Step2 音素を認識する】

この時間に取り扱ったキーサウンドゲームに対しては、「アルファベットの音を聞き取るのが難しかった」や「少し難しかったけどやりがいがあった」という感想が見られ、児童が難しさを感じながら取り組んでいたことが明らかになった。実際、初頭音のキーサウンドではほとんどの児童が消しゴムを取れていたが、語尾音のキーサウンドで消しゴムを取れた児童

は数名であった。また指導をしていて、hなどの無声音を聞き取りづらそうにしている児童、ゲームのルールがあっているか心配そうに周りを見ながら取り組む児童の様子も見られた。

【Step3 単語が読めるという認識を持つ】

ここで最も多かった記述はStep1同様、活動の楽しさに関する記述であった。「ゲームや歌が楽しかった」や「レパートリーが多いのが楽しかった」という楽しさに関する言及が、ほとんどの児童で見られた。一方Step1で見られたような本指導を単語練習と捉える感想は、Step3では見られなかった。

本指導がねらいとしている「音と文字」に関する記述や「読むこと」に関する記述もいくつか見られた。「注意深くアルファベットの音が聞き取れた」や「どうやったらその単語が読めるのか書くことができるのかなどを知れてよかった」、「難しい発音もバラバラにして考えることで分かるようになることもあると分かった」という感想からは、児童自身が文字には音があることや英単語の読み方に気づいたことが示された。実際8時間目に読む活動を行った際には、英単語を声に出して読もうとする姿や1つ1つ音を発しながら単語を読む姿が見られた。

(2) 事前・事後アンケート

授業の事前・事後での変容について調査をするため、「英語学習に関するアンケート」を行った。まず問1~4では、情意フィルターの変容を見取るための設問を設定した。本研究で小中の円滑な接続を見取るための観点として用いた情意フィルターについて Krashen (1985) は、学習者の動機・自信・不安などの情意的要因が言語習得に影響を与えたとした情意フィルター仮説を提唱している（望月, 2018）。つまり、学習者の英語学習に対する動機づけが高く、自信もあり、不安がないという情意フィルターが低い状態ほど、言語習得は進むということである。そこでアンケートでは、「動機づけ（問1）」「自信（問2・3）」「不安（問4）」に関

連する4つの設問を設けた。

- | |
|-----------------------------|
| 問1 英語の学習は好きですか。(動機づけ) |
| 問2 英語は得意ですか。(自信) |
| 問3 初めて見た英単語の読み方が分かりますか。(自信) |
| 問4 中学校の英語学習は楽しみですか。(不安) |

回答には4件法を用い、「あてはまる」・「どちらかと言えばあてはまる」「どちらかと言えばあてはまらない」・「あてはまらない」と選択肢を設定した。また問4の不安に関する設問においては、その理由を4技能の「話すこと」「聞くこと」「読むこと」「書くこと」と「その他」からの選択とした。

結果は次の表1の通りである。表1では、「あてはまる」・「どちらかと言えばあてはまる」とポジティブな回答をした児童の人数をまとめた。どの項目においても人数の増加は見られたものの、その増加数は1~2人と、全体的に大きな変化は見られなかった。

表1 英語学習に関するアンケート結果(人)

	前	後
問1 英語の学習が好き	29	30
問2 英語は得意	22	23
問3 初めて見た英単語が読める	23	25
問4 中学校の英語学習が楽しみ	20	22

続いて問4の回答理由に着目して分析を行った。ここでは「不安→楽しみ」、「楽しみ→不安」と項目をまたいでの回答の変化が見られた児童を抽出した。すると、「不安→楽しみ」とポジティブな変容があった児童5名中5名が、その理由に「読むこと」を挙げた。逆に「楽しみ→不安」とネガティブな変容があった児童のうち「読むこと」を理由に挙げたのは3名中0名で、3名全員が「書くこと」を理由に挙げた。このことから、音と文字の指導が中学校の英語学習に対してポジティブな感情を与えたこと

が明らかとなった。このことは以下の分析からも見て取れる。問1~4の回答において2項目以上の変化が見られた児童を抽出したところ、抽出した4名中3名が、問4においてポジティブな変容が見られた児童であり、その理由を全員が「読むこと」と回答していた。その3名の中の1名を児童Aとし、具体的な変容を以下に記載する。

【児童A】

- ・問1 英語の学習について
「どちらかと言えば好き」⇒「好き」
- ・問4 中学校の英語学習について
「どちらかと言えば不安」⇒「楽しみ」
- ・問4 中学校の英語学習が楽しみである理由
：英語を「話すこと・読むこと」

続いて問1~4に加え、事後には音と文字の指導の感想や個々の英語学習環境について問うアンケートも実施した。以下がその設問である。

- | |
|---|
| 問5 Fun timeでの学習は、英語の学習に役立つと思いますか。 |
| 問6 Fun timeで行った学習のうち、最も印象に残っている活動は何ですか。 |
| 問7 Fun timeを通して考えたことや感じたこと、感想を教えてください。 |
| 問8 学校での外国語の授業以外に、英語の学習はしていますか。(自主学習以外) |
| 問8-1 今回Fun timeで行ったような学習をしたことがありますか。 |

まず、問5の本指導の有効性について問う設問では、「役立つ」・「どちらかと言えば役立つ」・「どちらかと言えば役立つたない」・「役立つたない」・「分からない」の5つの選択肢の中からの回答とした。その結果、33名中28名が「役立つ」、4名が「どちらかと言えば役立つ」、1名が「分からない」と回答した。ほとんどの児童が本指導を有効な指導と捉えていることが明

らかになった。

次に問6は印象に残っている時間、または活動を選択する形での回答としたところ、上位3つが7時間目(13名)、5時間(7名)、6時間目(6名)という結果となった。最終時間の8時間目を印象的と回答した児童は1名しかいなかった。

問7の記述式の回答では、大きく分けて2つの感想が見られた。まず1つ目は情意面に関する感想である。授業冒頭にゲームを交えた活動を行うことで、緊張がほぐれたり楽しさを感じたりと、児童の心情に変化が見られた。

- ・ Fun time では楽しみながら学習できたので、覚えるというよりも体になじむと言う感覚で、自然と様々なことが覚えられました。なので、全く無理せず、勉強が楽しくなく、覚えなきゃというプレッシャーもなく授業に臨むことができました。
- ・ 今回 Fun time で歌やゲームをして、英語って楽しいなと思うことができました。

2つ目は文字が持つ音、読み方に関する感想である。本指導でねらいとしていることに関連した感想もいくつか見られた。

- ・ 音の足し算がとても楽しかったし役立つと思います。理由はアルファベットを入れることで英語をすぐ読めるからです。
- ・ ジングルやキーサウンドゲームでそれぞれの音が分かりました。それによって少し読んだり書いたりすることができました。

これらの記述から、音と文字の指導は「読むこと」に対する効果だけではなく「英語が楽しいと思えた」や「プレッシャーがなくなった」というように、情意面に対しても効果があることが明らかになった。

問8では、英語の学習環境と本指導の効果の

関連性を見取るため、「1 塾」・「2 英会話教室」・「3 オンライン英会話」・「4 その他」・「5 特にしていない」の5つの選択肢からの回答としたが、関連性は見られなかった。また1~4の選択肢を選んだ児童に対して、問8-1で筆者が実践したような学習の経験があるかを尋ねたが、こちらにおいても効果との関連性は見られなかった。

4. 考察

以上の分析から、本研究のRH「音と文字の指導を取り入れた授業を行うことで情意フィルターが下がり、中学校の英語学習への意欲が高まる」は立証されたとは言えないという結果となった。しかし、いくつかの成果が得られた。

成果は大きく分けて3つある。まず1つ目は音と文字の指導の効果である。本指導は「文字とそれに対応する音の理解」と「英単語が推測して読めることを実感すること」の2つをねらいに据えて実践した。前者のねらいに関しては、アルファベットクイズの結果や児童の様子から、文字の音を理解させる効果があったと感じている。後者のねらいに関しては、最終時間の8時間目を印象的だと答えた児童が1名しかいなかったこと、また「読めた」という感想があまり見られなかったことから、児童に実感を持たせることができたと言いはし難い。しかし一部の児童においては、ワークシートやアンケートの記述から、単語の読み方に気づくという効果があったと考えられる。またアンケート問4の中学校に関する設問において、ポジティブな変化が見られた児童全員がその理由に読むことを挙げていたことから、音と文字の指導は中学校の英語学習に対してポジティブな感情を与える効果があることも明らかとなった。実践中は、回を重ねるごとに文字を見ると自然に音を発するようになっていたり、単語を見て読もうとする姿勢が児童に見られたりしたことから、文字に対する関心を向上させる効果もあったのではないかと捉えている。

2つ目は英語を学ぶ楽しさを生み出したことである。アンケートやワークシートでは、ほと

んどの児童から「楽しかった」という感想が見られたことから、本指導は児童が英語を楽しく学ぶことができる方法であると考えられる。また英語を苦手とする児童からは「Fun time できんちょうもほどけました」や「英語が得意でなくても楽しめて良かった」という記述もみられた。その理由に「ゲームや歌での活動で覚えるというよりも自然に身につく感覚があったこと」を挙げており、本指導は英語を苦手とする児童でも無理なく取り組める方法であると考えられる。

3つ目は発音と自信の関係性である。本指導では発音の正確さを求めるような指導はしていないものの、「上手く発音できなかった」や「発音が上手にできた」という記述が見られたことから、ネイティブのように上手に発音できることは、児童の英語に対する自信につながる可能性があるという、筆者自身の気づきを得ることができた。

その一方で2つの課題が挙げられた。まず1つ目は児童の理解度の把握である。音から文字へつなげるためには、アルファベットの形・名称の認識、音読みの認識、音素の認識など理解しなければならないことが多くある。限られた時間の中で指導するためには、児童の実態を把握することが重要だと感じた。本指導でいうと音素の認識である。キーサウンドゲームの様子から、児童は語尾音を含む単語の構造の理解が十分ではなかった。一方でアルファベットの認識と音読みは比較的できている児童が多かった。このことを事前に把握していれば、音素の理解のための時間を十分にとる全体計画ができたはずである。

もう1つは、「単語が読める」という実感を与える指導の検討である。児童の感想の多くが「楽しい」を占めていたこと、最終時間にあたる8時間目を印象的だったと答えた児童が1名しかいなかったことから、本指導で実践した読む活動では「単語が読める」という実感を与えるまでいかなかったと考察する。単語の読み方に気づかせることはできたものの、その気づきを実感につなげることはできなかった。気づき

を実感につなげるためには、テストを実施したり少人数で読んでみたり、本を読んでみたりと、より実感を抱きやすい活動を検討する必要がある。

5. おわりに

以上のように、本研究では仮説を立証するだけの効果を得ることはできなかったが、筆者としては児童の「読むこと」に対する効果を感じることができた。その後、本指導を受けた児童の担任の先生から「初見の単語に出会った際に、音から考える視点がしっかりと児童に根付いている様子が見られた」という報告を頂いた。小中の円滑な接続のためには、まず小学校段階で文字を音から考える視点を、音と文字の指導を通して養う必要があると考える。

6. 引用文献

- 尾上利美 (2016) . 「小学校英語教育へのフォニックス導入に関する一考察」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第 67 巻, 75-80.
- ベネッセ教育総合研究所 (2016) . 「中高の英語学習に関する実態調査 2015」ベネッセ教育総合研究所ホームページ
https://berd.benesse.jp/up_images/research/Eigo_Shido_all.pdf 最終閲覧日: 2022年2月20日.
- ベネッセ教育総合研究所 (2018) . 「中3生の英語学習に関する調査〈2015-2018 継続調査〉」ベネッセ教育総合研究所ホームページ
https://berd.benesse.jp/up_images/research/Tyu3_Eigo_Keizoku_web_all1.pdf 最終閲覧日: 2022年2月20日.
- 望月昭彦 (2018) . 「新学習指導要領に基づく英語科教育法 第3版」大修館書店.
- 文部科学省 (2017) . 「小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語活動・外国語編」東洋館出版社.
- 山本玲子・田縁眞弓 (2020) . 「小学校英語 だれでもできる英語の音と文字の指導 音から文字への7つのステップ」三省堂.